
ネクロマンサー

以外

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネクロマンサー

【Nコード】

N7420D

【作者名】

以外

【あらすじ】

一昨日俺の両親が交通事故で死んだ。残されたのは俺と幼い妹だけ・・・

第一話 歪みの果て

・ 一昨日俺の親が交通事故で死んだ。残されたのは俺と幼い妹だけ・
もちろん、学生である俺がアルバイトに出たところでその稼ぎでは到底暮らしてはいけない。だからと言って、借金生活から逃げてきた俺達には頼る親戚もない。(どうするんだこれから・・・)と途方に暮れていたそんな時
「奴」が見えるようになった・・・

第一話

歪みの果て

「おい！なにやってんだ！」バカでかい怒鳴り声が俺の耳を貫く。
「す、すいません・・・」
「ったく、今日の客に出す料理、全部ぶちまきやがって！！また最初からやり直しじゃねーか」
「ごめんなさい！次は気をつけます・・・」
「ったく、次やったらタダじゃおかねーからな！覚悟しとけよ！」
タタタつと足音が遠ざかる。どうやら先輩は行ってしまったようだ・
・
「・・・片付けるか・・・」俺の名前は聖青春道^{ひつ}の真っ只中をゆく高校2年だ。ひょんとしたことで両親を失い、残された妹と暮らす為、学校を休んでアルバイトに出ているのだが、なかなかうまくいかない。今まで通ったバイトは全部途中でクビ・・・どうやら今回も危なくなってきたな

・・・ない・・・い

!?・・・今のは??

なんだ気のせいかな。何か聞こえたような気がしたけど。

「さあ、この散らかりを片付けないと」

俺はさつき自分が転んでぶちまけてしまった

「シチュー」の残骸を見て気合いを入れ直した。その後ろから肩を叩かれた。

「よう、聖。お前またやつちやったの?」

そこには友人の翼（つば）が立っていた。翼とは中学からの仲で、いつもドジな俺をかばってくれる俺にとっては憧れの存在だ。

「もうすぐ七時だぜ、いいのか?三枝ちゃん迎えにいかなくて?」

三枝は俺の唯一の家族であり妹だ。歳は10で本人は俺に子供扱いされるのを相当嫌がっているが、今は俺のアルバイトが終わるまでは学童保育に預けている。

「あとは俺に任せて、お前は早く三枝ちゃんのところに行つてやれよ。」

「悪い、翼じゃああとは頼んでも・・・」

「いいから!いいから!さあ早く行つた!行つた!」

俺は翼のおかげでバイトを早めに切り上げることが出来た。時間はまだ6時、学童保育までは20分で着くから、久しぶりに早く迎えに来たら三枝の奴、びっくりするだろうなあ・・・

・・・こ・・・ち・・・に・・・かい

?!な、何だ?!

・・・こつち・・・に・・・こな・・・かい

この声さっきも・・・

その時俺の視界のギリギリの範囲にコウモリのようなものが現れた。

「こつちにこないかい」

「うわ!？」

俺はそいつに驚き尻餅をついてしまった。

人のような姿をしているが赤い目、背中に6枚の黒い翼、人とは思えない肌の白さ・・・言葉では伝え切れない位異様なそいつが俺の前に立っていた。

第一話 歪みの果て（後書き）

はじめまして！皆さんは「ネクロマンス」と言う言葉を聞いたことはありますか？辞書で調べたところ、蘇生、反魂などの意味が出てきました。分かりやすくいうと、「死んだ魂をこの世に呼び戻す」ことです。この物語はそんな架空現象を題材にした話です。気が向いたら読んでみてください！

第二話 夢

「こつちにこないかい、聖？」

そいつは繰り返した。なんだ！？この化物は・・・

「な、何だ、お前は？何で俺の名前を知ってる？」

そいつはフツ笑った。

「なんだ、聖。俺を知らないのか？教えてやるよ。俺は

「お前自身」だ。」

「な、何だつて言ってる意味がわかんねえよ・・・」俺は自分の前で起きてることが信じられなかった。このコウモリみたいな化物と会話していることもそうだが、街道を通る人たちがまるで俺達「みえていない」ように素通りしていくからだ。

そいつはそんな俺の恐れおの退いた行動を見て、楽しむ様に繰り返した。

「俺は

「お前自身」だ。」「な、なんでそうなるんだよ。俺はお前みたいな奴知らないぞ？・・・」

俺は自分に

「落ち着け」と言い聞かせそいつに質問した。

すると、そいつはこの世のものとは思えないえげつない声で高笑いした。

「当たり前えだ、普通の人間に

「俺達」が見えるわけないだろ！」

「「俺達」・・・だと？お前みたいなのが他にもいるのか？？」

そいつ笑うのを止めてため息をついた。

「しょうがねえ、見せてやるよ。」

そいうとそいつは

「パチッ」と指を鳴らした。その瞬間、目の前が真っ暗になった。

「きこえるか？聖？」

暗闇の中からそいつの声がした。正体も判らない化物に自分の名を呼ばれるのには少し抵抗があったが、仕方なく返事をした。

「ああ、聞こえるよ。」

「今から目に映ることはお前にとってはおぶったまげることだろうが、絶対に声を出すなよ」

俺はそいつの言うことを信じていいのかどうか迷っていた。

「・・・声をあげたらどうなるんだ？」

「声をあげたら・・・死ぬぜ、今も狙われているからなお前は。」

・・・成程。そういうことか・・・不思議なことに俺に恐怖はなかった。恐いもの見たさというのだろう。この感覚は・・・これから起こることに俺は期待していた。「俺の言うことを聞くも聞かないもお前次第だ。じゃあ行くぜ！」

そいつが言い終わると目の前が明るくなった。

（なんだ、さっきまでいた街灯じゃないか。）

しばらくたっても何の変化もない。

（何だ・・・悪い夢でもみてたのか俺は・・・）

何も起こらずぼおっとしていると、向こう側から人が歩いてくるのが見えた。

（なんだ、人が歩いてじゃないか、やっぱり夢でも見てたんだ。）
向こう側から歩いてくるのは若い女性とさっきみたような化物だった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7420d/>

ネクロマンサー

2011年1月27日15時11分発行